

# 『官話』（新本文書）における動詞の形態

高 橋 俊 三

はじめに

『官話』（新本文書）は、もと新本家所蔵のものであったが、現在は八重山博物館に寄贈されて、その蔵書となっている。また、石垣市立図書館にはその写真複製本がある。表紙に次のように書かれている。

光緒四年戊寅（芒）種吉祥日寫之

官 話

松茂氏杣山假筆者

新本仁屋

當能

光緒四年は明治十一年、西暦一八七八年にあたる。

官話集は主に中国語学習のテキストとして用いられた。『官話』は、「称呼類」「内外親属称呼之類」「向人回答類」「人物死後称呼之言」「応答人物死後之類」「二字話」「三字話」「四字話」「五字話」から構成されていて、およそ二五〇〇の中国語の語句が記載されている。

官話について、真境名安興は「備忘録第11巻」（注2）で次のように述べている。

○これら漂着唐人から官話を稽古するものもあるし、又そのとき薩摩の在番奉行が那覇の総綱挽くツナヒキ>を見物すると兼て秘してある日本との交通状態が分るといふて唐人どもには綱挽の金鼓の音を病氣祓ひのためであると欺き、官話稽古人共は態々平常の通り唐人の師匠の宅に行ったといふことが見えて居る。そして此の時代（乾隆35年頃…高橋注）には、漂着船などの準備のために、宮古や八重山の人々にも稽古させたやうである。

また、武藤長平は『西南文運史論』（注3）で次のように述べている。

○長崎に於ける唐通事の支那語稽古の順序を略説するが、唐通事は最初発音を学ぶ為に『三字経』『大学』『論語』『孟子』『詩経』等を唐音で読み、次に語学の初歩則ち恭喜、多謝、請坐などの短き二字を習ひ、好得緊、不曉得、吃茶去などの三字話を諳んじて更に四字以上の長短話を学ぶ、その教科書が『譯訶長短話』五冊である。（51頁）

○（薩摩藩での）教科用書としては『二字話』『三字話』『長短話』『小学生<sup>（ママ）</sup>』『請客人』

『要緊話』『苦腦子』『譯家必備』『瓊浦通』『三才子』『三折肱』『養兒子』等を読習ひ、『小説精言』『小説奇言』『三国志』『水滸伝』『今古奇観』『唐話試考』等を卒業することを常例とした。其中で『二字話』『三字話』『長短話』『請客人』『苦腦子』等は鹿児島藩で刊行されて居たといふ説もある。(56頁)

○されば首里、那覇は無論のこと宮古、八重山二群島や其他の離島にも随分支那語が奨励された、されば今日先島へ遊んで唐通事の家々を採訪すると諸種の支那語学書を見出すことがある、私は先年の夏、首里の普天間氏、宮古島の某氏、石垣島の金城、宮城、大浜諸氏（是は唐通事家である）の家々に採訪して支那語稽古本を見た。其主たるものはやはり『二字話』『三字話』『四字話』『五字話』等の謄写本であつて、又た久米村人が特に官話稽古の為に作つて『官話集』なるものを沖縄県立図書館で一閱した、尚ほ琉球特有の支那語稽古本『百姓官話集』と『尊駕』と称する官話集を宮古島と首里とで見た、…支那小説で最も流行したものは『人中画』で支那語稽古の為に全琉球群島で読まれたものらしい、…石垣島の唐通事家で見た『四字話』『五字話』等には支那音には福建語を附し和訳には薩摩の土音方言を用いて居たのは頗る妙で当時琉球人に必要なる日本語は薩摩方言のみであつた事実が偲ばるるではないか。(60～61頁)

○琉球は無論のこと薩摩にすら北京官話を話し得るもの、あつたのは支那文明東漸の門戸として大いに誇るべきことで、当時唯一の海外貿易港たる長崎には南支那語のみ流行して北京官話を能くするものがなかつたのに比して私は実に奇異の感に耐えない。(61頁)

これらからすると、八重山でも中国語の学習が行われたようである。そこで使われた言葉はどのようなものであったか、その実態は不明である。それは知識階級の言語として、八重山諸方言に影響を与えた可能性がある。『官話』に記載された訳語がそのままその講義の言語であるということにはならないが、反映していると考えられる。これを分析し、その実態を明らかにすることは有意義なことである。拙論は、その動詞の形態・活用を明らかにしようとするものである。蛇足ながら、八重山方言の音韻の特色である、本土の語頭w音に対応するb音の例も見られる（「忘記 バスル」<792>）。また、「好嘴 グワイチラ、八重山言ニテハイダマノクト」<1863>とか「鼻子聞々 八重山言ニテ カビト云言也」<2226>といった八重山方言も稀に記載されている。

## I 動詞の形態

『官話』の中の動詞の例を分析して、どのような語幹からできているかによって分類

し、次にどのような接尾辞がついているかによってさらに細かく分類することにする。理論的にはこのよう形もあると考えられるものでも、『官話』に用例がないものは、記述しない。また、総合的な記述の際は省略されるようなものでも、慣用的なものは、記述する。

従来の方法に従って、本土の動詞の語幹に対応している語幹（連用形を除く）を「基本語幹」と呼び、「連用形」の語幹を「連用形語幹」と呼び、「連用形+居り」あるいは「連用形+有り」が融合して作られている各種の形の内変化しない部分を「融合語幹」と呼び、「連用形」+「て」あるいは「連用形+たり」の各種の形の内変化しない部分を音便語幹と呼ぶことにする。なお、表記にあたっては、『沖縄語辞典』を参考にしたが、音韻体系が明らかになっていないので、暫定的なものである。また、記号は例えば、「ツ」と書かれているものは、ツイ[tɕi]と読まれたのか、ツウ[tɕi]と読まれたのか、「チ」[tɕi]とよまれたのか不明であるので、そういった各種の発音に変化する以前の形のまま、c uと表記した。なお、子音のあとのjは破擦音をあらわす。『官話』の引用にあたっては、まず中国語に付された訳を、次に（ ）内に中国語を、くゝ内に参考文献の（5）に付けられた通し番号を記載した。

## 1. 基本語幹

### （1）志向形

①基本語幹に-aがついて、志向・勧誘などの意をあらわしている。

○イヤト ノデ アスバ（與你吃頑々）<2377>（注3）

○マジウン モトテ イカ（与我回去）<2145>

②基本語幹に-a N t i が付いて「…しようと」の意をあらわしている。

○フルモノ カフランテ シヨン（要買古董）<2225>

○ネンダンテ シュン（要睡覺）<1540>

### （2）未然形

①基本語幹に-a N が付いて打ち消しをあらわしている。ただし、「来ない」のばあいには-u N が付く。

○ツリベノ ウラン（没有同伴）<2009>

○クウン（不来）<350>

②基本語幹に-a s u が付いて、使役をあらわしている。

○シヨシヨ ヒナラス（減去些）<1703>

○アリ トトミテ サキウ ノマス（留他吃酒）<2094>

③基本語幹に-a r i N が付いて、可能をあらわしている。次の例はその打ち消しの意、すなわち不可能をあらわしている。

○ツイニ ウモイイダサラン（竟想不出）＜1990＞

○クドハノ ツクサラン（不可尽言。クドハはクトバの誤り）＜2210＞

### （3）終止形

- ①四段活用動詞や一段活用動詞に対応する語（以下、四段動詞とか一段動詞のように略す）においては、次のように古典文法の「終止形」で文（1語の訳文も含む。以下同様）を終止しているものが約85例ある。

○クマカニ ウモフ（斟酌）＜622＞

○シル（曉得）＜672＞

- ②二段動詞においては、古典文法の「終止形」で文を終止したものが2例ある。

○バスル（忘記）＜792＞

○ナイノ ユル（地震）＜890＞

また、古典文法の「連体形」形で文を終止しているものが7例ある。

○ウソリハツル（怕羞）＜801＞

○ヒソカ タツノル（密訪）＜1025＞

○グウン ウクル（報恩）＜531＞

また、一段活用に変化して、その終止形（連体形と同じ形）、すなわち基本語幹に-uが付いた形で文を終止しているものが約61例ある。

○アミル（洗澡）＜592＞

○モンサシ イリル（鎖門）＜1040＞

○サイワイウ ウケル（享福）＜330＞

- ③サ変動詞においては、古典文法の終止形の「ス」で文を終止しているものが2例、連体形の「スル」で終止したものが約18例ある。

○イヤニ キフク ス（帰服你）＜1625＞

○女シタクスル（仮粧婦人）＜2213＞

- ④ラ変動詞においては、古典文法の終止形の「アリ」で文を終止しているものが1例あるのみで、「アル」の例はない。

○イイ キコイ アリ（有名声）＜1619＞

- ⑤カ変動詞とナ変動詞においては、古典文法の「終止形」で終止した例はみあたらない。

### （4）禁止形

- ①基本語幹に-u n a が付いて（「終止形」にナが付いた形で）、禁止をあらわしている。

○ムラソナ（不要走風）＜2212＞

○カクソナ（休要隠蔽）＜2184＞

②基本語幹の「終止形」の末尾がルの場合はルガンとなり、「言う」の場合は、ラ行四段化したイルにナが付いた後に、それがさらにインナと変化している。

○ミイステ クインナ（不要見快）＜2083＞

○イツハリコト インナ（不要説（言＋荒））＜1926＞

#### （5）連体形

①基本語幹に-u が付いて連体修飾語となっている。

○ヒマ アルバア（有閑的時候）＜2381＞

②-u に「ハズ」（筈）が下接して、推量をあらわしている。

○モトテ コル ハズ（可以回来）＜2120＞

#### （6）假定形

基本語幹に-i b a が付いて假定条件をあらわしている。

○ホデ カツメリハ 章トナル（下筆成章）＜2215＞

○ウヤ ヨタシヤ アリバ ヤナクワヤ ナサン（虎不生狗）＜2207＞

○ヒトクトバ イテリハ（一言既出）＜2235＞

#### （7）命令形

基本語幹に-i あるいは-e が付いて命令の意をあらわしている。

○メノマイニ イリ、タンカニ イレ（當面説）＜1562＞

○トリメシヤウリ、ウキトリ（請収）＜736＞

○トウジン カチャキレ（灯心撥）＜1767＞

なお、次の例は、古典文法の「終止形」にあたるとも考えられが、命令形とするのが穏当であろう。

○クイテ クウ（跳過來）＜1575＞

## 2. 連用形語幹（本土の連用形の語幹に対応している語幹）

連用形語幹に-i が付いたものが、「連用形」にあたる。「連用形」は次のように用いられている。

①中止法に用いられている。

○ケツキヤケシ マルボナ（失脚跌倒）＜2187＞

○アン エイ カン エイ、ナンノ カンノ イヨス（説山説水）＜2117＞

②グレサ（苦しい）が付いて動作の困難さをあらわしている

- マナビガタサ（難学）＜793＞
- ③複合動詞を作っている。
  - ミヤボル（看破）＜899＞
- ④転成名詞を作っている。
  - ウメマイ（問候）＜495＞
  - キキゴト（好聴）＜625＞
- ⑤ニが付いて動作の目的をあらわしている。
  - ヨルクビニ チヤン（来慶賀）＜1622＞
- ⑥ヤ（は）が付いて、それにナランに続いて、不可能をあらわしている。
  - スクイヤ ナラン（救不活）＜1399＞
- ⑦ドンが付いて強調をあらわしている。
  - イヤ イチ ミイドン サハ（你若去看）＜2273＞
- ⑧ビキイ（べき）が付いて当然などをあらわしている。
  - アワリンベキ（可憐）＜620＞

### 3. 融合語幹（「連用形」に「居る」が融合したものの語幹）

（1）融合語幹に－u Nが付いた形は、肯定普通態現在（注4）（…する）をあらわしている。

- ①この形で文を終止したものは、四段活用動詞に対応する語では、47例ある。
  - クママテ ヨムン（念到那裡）＜1678＞
  - シバシバ イチャヨン（屢次相見）＜2153＞
- ②一段活用動詞に対応する語では、1例のみある。
- ③二段動詞および一段動詞では、10例ある。
- ④サ変動詞では、3例ある。
- ⑤ラ変動詞では、アンは3例ある。
- ⑥カ変動詞とナ変動詞では、この形で現在・未来形の例がない。
- ①から⑥のことと、1.（2）①～⑤までの、終止の形の出具合を表にすると次のようになる。

	「終止形」による終止	「連体形」による終止	融合語幹＋u N
四段動詞	8 5	／	4 4
一段動詞	9	／	2
二段動詞	2	6	0

一段化した二段動詞	5 8	／	9
サ変動詞	2	2 5	9
ラ変動詞	1	0	3
カ変動詞	0	0	0
ナ変動詞	0	0	0

表をみて注目されるのは、本土の「終止形」「連体形」による終止が、琉球方言の終止のより、多い（約74%）という点と、二段動詞において一段化した形が多い（約88%）という点と、「連体形」と「終止形」が異なる語においては、前者が31例で、後者の5例より多いという点である。

（2）融合語幹に－u r uが付いた形は、次のように用いられている。

①ごく稀であるが、文を終止している。現在の首里方言では、係助詞のd uの結びとしては用いられるが、普通の終止法には用いられない。

○クチ ソヨル（唸嘴）＜576＞

○モノ アタラシヤ スルモノノ モノヤ カムル（敬食得食）＜2114＞

②連体修飾語となっている。

○サウドフ スル コト（大嘈動）＜1898＞

○ウンギ ハスリヨル モノ（忘恩負義）＜2121＞

○テイ アラヨル カバシモノ（香肥皂）＜1716＞

（3）融合語幹に－u が付いた形（融合準連体形）。

①融合語幹に－u g aが付いた形は、疑問詞を受けて文を終止させている。

○タガ ケテ イヤ カモウヨカ（誰来管你）＜2107＞

○イキヤサ ウユカ（還価値）＜1559＞

○マアカラ ヨミウカ（從那裡念）＜2283＞

②融合語幹に－u s uが付いた形は、「…すること」の意をあらわしている。

○ナンノ カンノ イヨス（説長説短）＜2118＞

（4）融合過去形（「連用形」＋「居り」＋「たり」に対応）

融合語幹にu t a Nが付いた形は、過去の可能性（「もう少しで…するところだった」の意）をあらわしている。（首里方言では過去の眼前の出来事の意で多く用いられる。）

○アボナイ シニウタン（希乎死）＜1568＞

（5）ヤラン融合形（連用形に－o：Nが付いた形）

持続・繰り返し（…している）の意をあらわしている。サ変動詞にのみ用いられ

ている。

○アマ イイ クマ イ シヤウン（有七没八）＜2368＞

（6）アン融合形（連用形に－a Nが付いた形）

過去をあらわしている。サ変動詞にのみ用いられている。

○アヤマチ シヤン（錯過了）＜1639＞

○リヤウハウ トク シヤン（両下便宜）＜2025＞

4、音便語幹（「連用形＋テ・タリ」が音便化したものの語幹）

（1）接続形（音便語幹に－iが付いた形。本土の「連用形」＋テの形に対応）

①接続形単独で中止をあらわしている。

○マタ イチ ハナス（再坐笑談）＜2197＞

②接続形に「ヤ…スマン」が付いて、禁止をあらわしている。

○ワステヤ スマン（不要忘了）＜2280＞

③接続形にンが付いて、逆接（…しても）をあらわしている。

○カハウシヤ イチン ツクサラン（謝不尽）＜1756＞

④接続形にクリ（呉れ）が続いて、依頼（受益）をあらわしている。

○クワンニ ウンノケテ クリ（転達官府）＜2143＞

（2）過去形（「連用形」＋「たり」の形に対応）

①音便語幹に－a Nが付いた形は、過去の意味で文を終止している。

○ウンナンザ カウタン（買了頭）＜1705＞

○ワサット チヤン（特来）＜494＞

②音便語幹に－a g aが付いた形は、文中に疑問詞イツ（何時）などのある疑問文を終止している。

○イツ チヤガ（幾時来）＜1742＞

③音便語幹に－a s u g aが付いた形は、逆接をあらわしている。

○イヤ タツニタスカ ウラン（尋你不在）＜2106＞

（3）持続態（接続形＋「や」＋「有り」に対応）

①音便語幹に－o：Nが付いた形は、持続の意味で文を終止している。

○ハカリゴトニ アタトン（中計）＜476＞

②音便語幹に－o：m iが付いた形は、「…するか」という疑問をあらわしている。

（一般に接尾辞のミは肯定終止のンと交替して、疑問の意をあらわす。）

○タリトミ タリラニ（穀不穀）＜1469＞



③音便語幹に－o：r i が付いた形は、持続の命令をあらわしている。

○タッチウリ（站着）＜848＞

④音便語幹に－o：t a N が付いた形は、過去の持続・状態をあらわし、文を終止している。

○ノリトウタン（湿透）＜472＞

## II 動詞の活用型

活用の型の抽出は次のようにする。

①まず、参考文献から予測される型ごとに代表的単語を選ぶ。

②「基本語幹」「連用形語幹」「融合語幹」「音便語幹」ごとに例を取り上げる。なお、同一の単語だけではすべての語幹例をあげられない場合は、同じ活用をする他の語で補う。二段動詞の基本語幹よりから作られた連体形は除外する。

③そして、接辞を除いた部分を音声表記する（これは、いわば「2 次的語幹」である）。

④4 つの語幹に共通な部分（1 次的語幹）を取り除く。用例が少なく異なる単語がとりげられている場合は、共通部分が単純に得られないので、それに相当する部分を取り除く。

⑤残った部分によって、語幹変化のパターンを得る。これらを表にして、異同を調べる。

このような方法で、以下分析していくことにする。まず、「くびる」「蹴る」「入れる」「拾う」の型も作るべく用例を探したが、適例がなかった。

### （1）「死ぬ」などのナ行変格動詞

次の過去の用例しか見あたらない。

○アボナイ シニウタン（幾乎死。融合語幹 sjinj-）＜1568＞

語幹変化パターンは「＃，＃，nj，＃」となる。（＃は例が見当たらないという印。以下同様。）

### （2）「書く」などのカ行四段動詞

○ラチン アカン モノ（濟事人。基本語幹 ak-）＜1395＞

○カタンキ ネンジ（瞌睡了。連用形語幹 kataNk-）＜1545＞

○ウキトイ カキヨン（要写領票。融合語幹 kakj-）＜2221＞

○メシ タチヨン（煮飯。融合語幹 tacj-）＜554＞

○キリコタキヤン（割碎了。音便語幹 kudakj-）<1720>

○ヤクシクニ ツチヤ(ン)（補了職事。音便語幹 cucj-）<2000>

次の「カITE」は「書いて」であろうか。そうだとすると、古典文法のいわゆる「連用形のイ音便化した形」のままで、イが脱落していないということになり、大変珍しい例となる。

○ハヤク カITE イキユル フン イタチ クメシヤウリ（早賜回文。音便語幹 kait-）<2251>

「カITE」を除くと、語幹変化パターンは「k, k, k j / c j, k j / c j」となる（/は2つ以上の形の並記をあらわす。以下同様）。

### （3）「脱ぐ」などのガ行四段動詞

○チャ ツケ（冲茶。基本語幹 cug-）<950>

ケに濁点がないが、前後関係よりあるものとみなす（以下同様）。

○クキヨシテ クフ（揺過來。連用形語幹 kug-）<1579>

○ノヂステタン（抜吊了。連用形語幹 nozj-）<1685>

○ツジヨル コト（接連。融合語幹 cuzj-）<747>

○コウチ コウ（挖出来。音便語幹 ku:zj-）<1460>

語幹変化パターンは「g, g / z j, z j, z j」となる。

### （4）「なす」などのサ行四段動詞

○ヨルサン（不准。基本語幹 jurus-）<398>

○シダシノ キヨラサ（打扮得好）<2191>

○シユブ ワカシヨン（決個勝負）<2181>

○サグエ イタチヤン（搜出来。音便語幹 idacj-）<1382>

語幹変化パターンは「s, s j, s j, c j」となる。

### （5）「立つ」などのタ行四段動詞

○ヨニ タタン（不用。基本語幹 tat-）<481>

○ウッタチ（起行。連用形語幹 uttacj-）<729>

○マツトウバ モチクウ（拿平来。音便語幹 mocj-）<1759>

○ウモカギ タツチ（掛念。音便語幹 tattej-）<290>

語幹変化パターンは「t, c j, #, c j / t t c j」となる。

### （6）「読む」などのマ行四段動詞

○ハステヤ スマン（不要忘了。基本語幹 sum-）<2280>

○コリヤ ワカ モトユリ ノソミ（是我素望。連用形語幹 nozom-）<2008>

- マアカラ ヨミウカ（從那裡念。融合語幹 yomj-）<2283>
- スムン（罷了罷。融合語幹 sum-）<1678>
- イヤト ノデ アスバ（與你吃頑々。音便語幹 nod-）<2377>
- チャ ノダン（哈了茶。音便語幹 nod-）<1565>

語幹変化パターンは「m, m, m j / m, d」となる。

(7) 「被る」「破る」「眠る」など語末がブルのラ行四段動詞

- ネンダンテ シユン（要睡覺。基本語幹 neNd-）<1540>
- 琉球方言で「眠る」にあたる語はネブルである。
- カタンチニンジ（側身睡。連用語幹 kataNcjiniNzj-）<1696>
- ハチ カンジユン（罪過。「ばち被る」に対応。融合語幹 kaNzj-）<1076>
- ウチャボタン（打破了。音便語幹 ucjijabut-）<1527>
- ンジ フメヤンタン（去跌坏。音便語幹 humijaNt-）<1697>

語幹変化パターンは「N d, N z j, N z j, b u / N t」となり、新しい活用  
の型が生じたことになる。

(8) 「飛ぶ」などのバ行四段動詞

- イヘニン ヲヨハン（不消説。基本語幹 oyob-）<1476>
- アソビ（玩々。連用語幹 asob-）<629>

語幹変化パターンは「b, b, #, #」となる。

(9) 「取る」などのラ行四段動詞

- ミツン モラン（滴水不漏。基本語幹 mor-）<2162>
- タビドウク トリウサメリ（收拾行李。連用形語幹 tor-）<2160>
- アリ トイモテ（奉承他。連用形語幹 to-）<1685>
- サグヨン（搜檢。融合語幹 saguj-）<478>
- ヒト壺ノ サキ トテクウ（拿一壺酒来。音便語幹 tot-）<2376>

語幹変化パターンは「r, r /', j, t」となる。

なお、「足りる」「忘れる」は四段活用の「足る」「忘る」に対応しているばあいもある。

- タラン、タリラン（不穀。基本語幹 tar- / tarir-）<701>
- タラン（不穀了。基本語幹 tar-）<1470>
- バスル（忘記。基本語幹 basur-）<792>
- ワステヤ スマン（不要忘了。基本語幹 wasut-）<2280>
- ウンギ ハスリヨル モノ（忘恩負義。融合語幹 wasurij-）<2121>

(10)「起きる」などの上二段動詞

○イヨイヨ 心ニ スギラ、ン (越発不過意。基本語幹 sugir-) <2422>

○アキハテ (厭気。連用形語幹。ak-) <1051>

○カイニモチヨン (将就用得。融合語幹 mocji:j-) <2110>

次の「モチイタン」からすると、ここの「チ」も長音なのであろう。なお、「用いる」に対応する語は『沖縄語辞典』や『今帰仁方言辞典』には載っていない。

○モチイタン (用了。音便語幹 mocji:t-) <796>

語幹変化パターンは「r, ' , j, t」となる。

(11)「受ける」などの下二段動詞

○ヒイ ツキリ (点火。基本語幹 cukir-) <633>

○メツ カケ (澆水。連用形語幹 kak-) <716>

○カキヨル コト (架着。融合語幹 kakij-) <968>

○命ヲ ウケテ コトヲ ナス (承命做事。接続語幹 uki-) <2217>

語幹変化パターンは「r, ' , j / ' , t」となる。

「落ちる」(上二段)に対応する語は、下二段に活用した。

○ウテテアト、アトナタン (落後。音便語幹 utet-) <1101>

また、本土の「尋める」(マ行下二段活用)は、次のようにア行あるいはヤ行下二段の活用していると考えられる。

○モノ トマイル (尋物。基本語幹 tomair-) <430>

「酔う」(四段)に対応する語は、下二段に活用したらしい。

○ヨクシウイ (仮酔。連用語幹 wi-) <505>

「ウイ」はw iを写したものである。

○ホナヘ (酔船。連用語幹 wi-) <584>

「ヘ」は上記の表記からして、w iと発音されたであろう。

○ウイル (酔了。融合語幹 wi-) <504>

○シクク ウイタン (十分酔了。音便語幹 wit-) <2095>

語幹変化パターンは「#, i, #, t」となる。

(12)「着る」「いる」などの上一段動詞

○イシヤ キリ (穿了衣服。基本語幹 kir-) <2132>

○マタ イチ ハナス (再坐笑談。音便語幹 icj-) <2197>

語幹変化パターンは「r, #, #, c j」となる。

(13)「切る」「入る」「知る」などの2音節ラ行四段動詞

○シランホナ（推不知。基本語幹 sjir-）<1600>

○キレアキリ（切開。連用形語幹 kir-）<1097>

○ウフカタ シキヨン（頗略曉得。音便語幹 sjicj-）<2055>

○イルイル シキヤウン（般々在行。音便語幹 sjicj-）<2200>

語幹変化パターンは「r, r, #, c j」となる。

(14)「射る」（接続形が促音便しない）

○トリ イヨン（打鳥。融合語幹 ij-）<943>

語幹変化パターンは「#, #, j, #」となる。

(15)「買う」など二音節のハ行四段動詞

○カウラン（買不来。基本語幹 kaur- あるいは ko:r-）<1689>

○ウシルコ（ブ）ノラヨン（背後罵。融合語幹 nora-）<1563>

○ンザ カウタン（買小廝。音便語幹 ko:-）<1706>

語幹変化パターンは「r, ', #, t」となる。

(16)「笑う」など語末がa uのハ行四段動詞

○カムラン（不管。基本語幹 kamur-）<715>

○ヨライ モトテ イキ（大夥回去。連用形語幹 jura-）<2011>

○ヒシヤ アラヨン（洗脚。融合語幹 araj-）<591>

○ヒト ツカテ ヤラチヤン（差人去。基本語幹 音便語幹 cukat-）<1595>

○ウシナタン（失落了。基本語幹 音便語幹 usjinat-）<1577>

語幹変化パターンは「w / r, ', j, t」となる。

(17)「思う」など語末がo uのハ行四段動詞

○ウマアラン（了不得。基本語幹 uma-）<1517>

不可能の意をあらわしている。打ち消し形は「ウマアン」と推定される。

○クマカニ ウモフ（斟酌。基本語幹 umu-）<622>

ウモフはu m u uと解釈し、それから活用語尾のuを取り除いた部分を語幹とみなす。

語幹変化パターンは「a / u, #, #, #」となる。

(18)「見る」

○ミル（看見。基本語幹 mir-）<540>

○ククルミニ シンタ（試做一做。ンタは「みら」に対応。基本語幹 Nd-）<2219>

○ミイステル（見棄。連用語幹 mi:-）<802>

○メタスケル（看顧。連用語幹 mi-）＜528＞

上記の例からこれもミイである。

○チイチ ミヨン（看々光景。融合語幹 mij-）＜2091＞

語幹変化パターンは「m i r / N d, m, m i j, #」となる。

(19)「言う」

○モノ イヤンス（封口。基本語幹 ij-）＜741＞

○メノマイニ イリ、タンカニ イレ（當面説。基本語幹 ir-）＜1562＞

○アン エイ カン エイ（説山説水。基本語幹 i-）＜2117＞

○ナンノ カンノ イヨス（説山説水。融合語幹 ij-）＜2117＞

○カホウシヤ イチン ツクサラン（謝不尽。音便語幹 icj-）＜1756＞

語幹変化パターンは「j / r, ', j, c j」となる。

(20)「行く」

○ヒトガラノ イカン（為人不好。基本語幹 ik-）＜2067＞

特殊な用法なので、どれほど一般化していたか疑問である。

○イタツラニ ヨケ（閑走。連用形語幹 juk-）＜1070＞

○ハヤク カイテ イキユル フン イタチ クメシヤウリ（早賜回文。融合語幹 ik j-）＜2144＞

語頭のイとヨは活用には関係しない。語幹変化パターンは「k, k, k j, #」となる。

(21)「する」

○ソウヤウ サフタン サ（大家商量。基本語幹 s-）＜2099＞

○ケツキヤケ シ マルボナ（失脚跌倒。連用形語幹 sj-）＜2187＞

○スビテ ツミニ シウン（都是撒貨。融合語幹 sj-）＜2295＞

○チカイ シユン（賭咒。融合語幹 sj-）＜659＞

○ウタ シヨン（唱曲子。融合語幹 sj-）＜1631＞

○アヤマチ シヤン（錯過了。アン融合形語幹 sj-）＜1649＞

○アマ イイ クマ イ シヤウン（有七没八。連用形語幹 i- / ' -）＜2503＞

アン融合形の「シヤン」は、語構成としては「連用形+タリ」でないが、意味や活用語尾などは似ているので、活用表には音便語幹のところに入れることにする。

語幹変化パターンは「s, s j, s j, s j<sup>注5</sup> \*」となる。

なお、一字漢字のサ変動詞は、二段活用に変化している例もある。

○ウモンジル（看重。重んじる。『沖縄語辞典』になし。umuNzjir-）＜462＞

○ツギル（遮着。「禁じる」に対応。基本語幹 cjizjir-）＜800＞

○ツキヨル（攔一攔。「禁じをる」に対応。融合語幹 cjizjij-）＜1737＞

○ワガクトバ シンジラ（ン）（不信我的话。信じない。基本語幹 sjiNzjir-）＜2379＞

○カルンズル（看軽。軽んずる。首里方言の接続形はkaruNzjiti）＜461＞

○ヤマイノ シヤウスル（生病。生ずる。首里方言の接続形はsjoꞌzjiti）＜689＞

○イロイロニ ヘンズル（千変萬化。変ずる。『沖縄語辞典』になし）＜2005＞

(22) 「来る」

○タフチ クウ（倒来。基本語幹 k-）＜878＞

○タガ ケテ イヤ カモウヨガ（誰来管你。音便語幹 kit-）＜2107＞

○ワサット チヤン（特来。音便語幹 ch-）＜494＞

語幹変化パターンは「<sup>注5</sup>k\*, #, #, k i t / c h」となる。

(23) 「居る」

○ツリベノ ウラン（没有同伴。基本語幹 ur-）＜2009＞

基本語幹の例しか見あたらない。語幹変化パターンは「r, #, #, #」となる。

(24) 「有る」

○ヒマ アル バア（有閑的時候。基本語幹 ar-）＜2381＞

○ハヂメ ウワリ シヨビ アン（有頭尾。融合語幹 a-）＜1709＞

-u Nが融合しているわけではないが、他の語の融合語幹の用法にあたる形ということである。

○チャナギ アガ（幾長。融合語幹 a-）＜1059＞

○ヤマイ アツテ イトマグイ（有病告仮。音便語幹 aQt-）＜2100＞

○ヒト アツテ モンウ マムル（有個人把門。音便語幹 aQt-）＜2395＞

語幹変化パターンは「r, #, ' \*, Qt」となる。

(25) 「ミシェーン」（なさる）など

○ヨクニ ナイメシヤウリ（請倒一倒。基本語幹 -mesjoꞌr-）＜1987＞

○トリメシヤウリ（請収。基本語幹 -mesjoꞌr-）＜736＞

○カウテイノ ウスジリミシヤウチヤン、天子之崩也（飛天。音便語幹 -mesjoꞌcj-）＜1183＞

語幹変化パターンは「sjoꞌr, #, #, sjoꞌcj」となる。

以上のことを表にすると次のようになる。

	基本語幹	連用形語幹	融合語幹	音便語幹
(1)死ぬ			n j	
(2)書く	k		k j ・ c j	k j / c j
(3)脱ぐ	g	g / z j	z j	z j
(4)なす	s	s j	s j	c j
(5)立つ	t	c j		c j / t t c j
(6)読む	m	m	m / m j	d
(7)被る	N d	N z j	N z j	b u / t
(8)飛ぶ	b			
(9)取る	r	r / ,	j	t
(10)起きる	r	,	j	t
(11)受ける	r	,	j / ,	t
(12)着る	r			c j
(13)切る	r	r		c j
(14)射る			j	
(15)買う	r	,		t
(16)笑う	w / r	,	j	t
(17)思う	a / u			
(18)見る	m i r / N d	m	m i j	
(19)言う	j / r	,	j	c j
(20)行く	k	k	k j	
(21)する	s	s j	s j	s j *
(22)来る	k *			k i t / c j
(23)居る	r			
(24)有る	r		, *	Q t
(25)なさる	s j o : r			s j o : c j

この表から、次のようなことが言える。

- ①「死ぬ」「居る」は不明の点が多くて、活用の型は確定できない。
- ②「書く」「脱ぐ」「行く」などにおけるキは、表記どおり k i と読まれたのか、c j i と読まれたのか、微妙な問題である。
- ③「読む」は融合語幹に m j という古い形もある点に注目される。



- ④「ウチヤボタン」のようにボガンに変化していない形がある。これはラ行四段であつたことを示唆している。
- ⑤「着る」「切る」の接続形は、首里方言ではおのおの c j i c j a N、c j i Q c j a N で、区別がある。『官話』には表記の区別がされていない。それが正確だとすれば、同じ活用ということになる。「射る」は古典文法では上一段活用であるのに、首里方言では「切る」と同じ活用になっている。『官話』ではどうであるのか、明らかにしたかったが、融合語幹の例しかなくて、それを明らかにすることはできない。
- ⑥「来る」の「ケテ」は文語であろうか。ちなみに、首里方言では Q c j i である。このほか全体的に、首里方言と比べると、音変化の度合いが弱く、やや古い状態を見せているといえよう。

## む す び

『官話』の意味を記した言語は沖縄方言に近いといえるが、本土語が相当に入っている。特に、肯定現在の終止において、古語の「終止形」「連体形」の形が「融合語幹+u N」の形より多い点に注目される。そして、①「終止形」と「連体形」の相違する語においては、「連体形」を多く用いていて、②二段動詞はほとんど一段活用化した形を用いていて、③「1音節漢字+サ変動詞」に対応する語は、多く一段活用化した形を用いている。①②は、本土では室町時代以降に生じた現象であり、③は江戸時代に生じた現象である。したがって、平安時代というより、江戸時代の動詞の形態の影響を多分に受けた語であつたといえよう。

## [参考文献]

- (1) 服部四郎 1955「琉球語」(『世界言語概説』下巻)
- (2) 国立国語研究所 1963『沖縄語辞典』
- (3) 仲宗根政善 1960「沖縄方言の動詞の活用」,『国語学』(4 1)
- (4) 津波古敏子 1992「沖縄中南部方言」,『言語学大辞典』(第4巻)
- (5) 高橋俊三・兼本敏 2001「『官話』の翻字および注釈」,『沖縄国際大学総合科学部紀要』(第5号)

## [注]

- (1)『比嘉春潮全集』第三卷文化・民俗篇(1971年 沖縄タイムス)の542頁

- (2) 『真境名安興全集』第三卷91頁
- (3) 『西南文運史論』(1925年岡書院。1978同朋社復刻)。
- (4) 参考文献(4)では「完成相現在・未来形」としている。
- (5) 「\*」は語構成、接尾辞などが他と相違していることをあらわす。